

日本海海戦における東郷平八郎の描かれ方

手 嶋 泰 伸

▶ キーワード

日本海海戦、東郷平八郎、
小笠原長生、安保清種、
司馬遼太郎

▼ 要 旨

本稿は日本海海戦における敵前回頭時の東郷平八郎の描かれ方について分析している。敵前回頭の指示を誰がどのように出すのかについてと、東郷が笑顔を見せるかどうかについて注目して分類すると、戦前の描かれ方は4種（小笠原型Ⅰ、安保回想型、小笠原型Ⅱ-1、小笠原型Ⅱ-2）に類型化できる。東郷の神格化は1930年代に進行するものの、その中心的役割を担った小笠原長生の描き方は多様であり、戦前において共通のイメージができあがっていたわけではなかった。司馬遼太郎『坂の上の雲』は戦前にあった4種の描き方の諸要素を引き継いでいたが、それらを整理・統合することで、連合艦隊旗艦三笠艦橋の厳粛さを強調することになった。それは『坂の上の雲』の映像化でさらに強調される。日本海海戦における東郷のイメージの固定化は、戦前ではなく戦後に発生した現象であった。

はじめに

日本海海戦、ひいては日露戦争の帰趨を決定づけたものとして捉えられる、1905年5月27日における連合艦隊司令長官東郷平八郎による、いわゆる「丁字戦法」移行のための敵前回頭の指示は、戦前から多数の伝記や戦記、文学作品で描かれた。

日露戦争中の様々な軍人の行動や逸話は、その後に修身教科書や唱歌の題材として取り上げられ、「神話」化した⁽¹⁾。その中でも、東郷平八郎の神格化は、海軍における日清戦争・日露戦争の広報や公刊戦史編纂の中心であった小笠原長生によるところが大きい⁽²⁾。

神格化された東郷言説の中で最も重要となる功績は日本海海戦における敵前回頭の指示であったが、日本海海戦を勝利に導いた連合艦隊の行動は東郷一人の偉業ということではできず⁽³⁾、敵前回頭時の三笠艦橋上は非常に混乱していたことも明らかにされている⁽⁴⁾。そのうえ、日本海海戦での日本の完勝とも言える戦果は、5月27日の昼間の砲撃戦よりも、その後の水雷攻

撃によるものであることも指摘されている⁽⁵⁾。また、日本の勝利は多分にバルチック艦隊側に存在した多数の問題点によるものだという事も指摘されており⁽⁶⁾、神格化された東郷像が虚像であることは明らかだ。

戦後において、司馬遼太郎の歴史小説は日本的なリーダーシップ像を描くものとして受容され⁽⁷⁾、代表作である『坂の上の雲』（1968年から1972年まで『産経新聞』に連載され、単行本は文藝春秋社より刊行）は、天皇制国家の中での神格化された東郷像とは一線を画した東郷平八郎の言動を描こうとしつつも、輝かしい歴史としての日露戦争像を再生産した。

歴史学界は司馬の歴史認識に潜む様々な不備やその虚構性を批判することになる⁽⁸⁾。司馬の小説を始め、伝記や戦記、文学作品などで描かれた日露戦争像はその虚構性や不備が指摘されることで、実証研究の中で事実確定の根拠史料となることは当然ない。そのため、東郷平八郎による敵前回頭の場面は数多く描かれてきたが、そうした描かれた東郷平八郎の言動は、田中宏巳氏等によってなされた東郷の神格化の分析以外で⁽⁹⁾、学術的に分析されることは少ない。

しかし、虚構であるからといって、それが史料になり得ないわけではない。国民に対して語られる内容から、海軍の宣伝工作の実態を明らかにした諸研究が示すように⁽¹⁰⁾、語られたことが史実であるかどうかではなく、どのように語るのかということからの分析は、戦争をめぐる諸問題において有用である。

そして、前述した田中宏巳氏による研究では、東郷の神格化の歴史的経緯は明らかとなっているものの、細部の描写についてまでは十分に分析されておらず、そのために、東郷がどのように描かれたのか不明瞭であり、神格化とされつつも、その具体性については課題が残っている。

敵前回頭の場面を描いた多数の著作物を、それが歴史的事実であるか評価するのではなく⁽¹¹⁾、その表現のされ方を分析し、それに基づいて、その描かれ方を分類することができれば、東郷の神格化の内実はより明瞭に理解可能になろうし、『坂の上の雲』に代表されるような戦後の著作物を包括した歴史的過程として描くことができるであろう。本稿では、東郷像の形成者であった小笠原長生の記述の変化を中心に、日本海海戦における敵前回頭を描くための諸要素から描写の類型化を行って分析していきたい。

I 小笠原長生による典型例とその周辺

日本海海戦で連合艦隊が勝利を収めてからかなり早い段階で東郷平八郎を称賛した書籍として、村上俊蔵編『東郷大将詳伝』（1905年）がある。しかし、その書籍の中でも、日本海海戦の記述中、東郷個人に関する描写はほとんどなく、海戦の経過が記されただけであった⁽¹²⁾。敵前回頭の場面は、バルチック艦隊が「日本艦隊に前路を遮られ、退かんか既に遅し、遮莫れ盲進瞥突、一気に突過せんと、最早死地に陥りたれば、外に活路を求むる暇なく、沖ノ島附近に至る頃、我に先つて砲門を開き、我亦之に応じて、砲声殷々、硝煙漠々」と記されているのみであり、連合艦隊の視点から描かれているわけではなかった⁽¹³⁾。

浜中仁三郎『東郷大将』（1906年）では、連合艦隊の視点から「主戦艦隊は少時南西に向首し、敵と反航通過する如く見せしが、午後二時五分急に東に折れ、其前面を変じて斜に敵の先頭を圧迫し」と記述しているものの⁽¹⁴⁾、東郷の決断の結果として描いているわけではない。

敵前回頭を東郷の決断として描いたものとしては水野広徳『此一戦』（1911年）があるが、そこでは「敵の距離約八千米突に近づくや、機を見て動くこと迅電の如き我が大将は、決然として左舷回頭の令を下した。大胆！又冒険！」とごく簡素にまとめられているのみである⁽¹⁵⁾。

芳文堂編『東郷大将』（1906年）や横山健堂『大将東郷』（1915年）のように、日本海海戦の場面の記述については、東郷が提出した戦闘詳報を引用することで代替しているものも多い⁽¹⁶⁾。

その点で、小笠原長生が『東郷元帥詳伝』（1921年）で描いた日本海海戦における敵前回頭の場面は、東郷の決断を強調したものである。その部分を引用すると、以下の通りである。

爰に彼我両隊は縦陣の以つて相對し、其の儘直進すれば、互に反對に通過し去りて利害共に相均しく、所謂五分五分の勝敗に了るべき形勢を成せり。然れども、恠くの如き平凡の戦闘に甘んずるは、敵の殲滅を期したる東郷司令長官の与する所にあらざるなり。長官は頭を回らして急度加藤參謀長を見たり。同時に參謀長も亦長官を見、両者の視線期せずして相合せ一刹那、參謀長声高く問ふて曰く、『長官！取楫になすべきか』と。司令長官『諾』と答へて思はず会心の笑を浮べ、三笠は同五分遂に左折して東北東に変針し、斜に敵の先頭を圧迫せんとせり⁽¹⁷⁾

『東郷元帥詳伝』が刊行された際、小笠原は予備役となって宮中顧問官を務めていたが、1914年4月から1921年3月まで東宮御学問所幹事として総裁の東郷を支えていた。小笠原は日清・日露戦争に関する海軍の戦史編纂事業の中心的人物であり、『東郷元帥詳伝』も小笠原が日露戦争中から収集した資料や関係者から聞き取った談話をもとにして執筆されたものである⁽¹⁸⁾。

『東郷元帥詳伝』における敵前回頭の描写は、以下の要素を特徴としている。まず、①敵前回頭は連合艦隊參謀長加藤友三郎が口頭で東郷に確認を求め、東郷が同意を与えて実施されたものとして描かれている。そして、②東郷は加藤に回頭の指示を与えた後、笑みを浮かべている。本稿では、これら2つの要素を含んだ描かれ方を、「小笠原型Ⅰ」とする。他の類型と比べると、東郷の笑顔が描かれることで、颯爽とした司令官像が強調される描かれ方であると言える。

この『東郷元帥詳伝』における敵前回頭時の描写は、他書のベースの1つとなっている。小笠原自身も『小学生全集1 乃木將軍と東郷元帥』（1929年）で小笠原型Ⅰの描写を踏襲している⁽¹⁹⁾。すなわち、加藤による口頭での確認と東郷の笑みが描写されているのである。この小笠原型Ⅰの描き方は、小笠原以外にも、久米元一「東郷元帥」（1930年）などでも用いられている⁽²⁰⁾。

この小笠原型Ⅰとは異なる描写がなされているのが、日本海海戦時に連合艦隊旗艦三笠の砲術長を務めていた安保清種の回想である。安保は次のように回想している。

加藤參謀長は突然「砲術長！君一ツ距離ヲ測ツテ呉レ、シツカリシタ所ヲ」と叫ばれたので、自分は直に測距儀について測つて見ると、敵の先頭にある旗艦「スウォーロフ」は正に八千米、最うこそ何れの舷で戦ふかを定めて貰はねばならぬのでありますから、自分は

「モウ八千米ニナリマシタ、ドチラノ舷デ戦サヨナサルノデスカ」と大声で報ずると、此時遅し彼の時早し、東郷長官の眼と加藤参謀長の眼とが期せずして相会し、互に何かうなづかれたかと思えた其の刹那に、参謀長の甲高い声が突如として響いた「艦長取舵一杯！」伊地知艦長が「エ、取舵ニデスカ」と念を押すに対し、参謀長は「ソーダ、取舵ダ」と確言して、徐ろに長官に向ひ「長官！取舵ニ致シマシタ」と報告され、茲に三笠は恰も蒼隼の翔鶴を搏つが如き勢を以て遂に其の艦首を急転して驀然東航敵の先頭を圧したのである⁽²¹⁾

この安保の回想での敵前回頭の描写は、以下の要素を特徴としていると言える。まず、小笠原型Ⅰとは違い、①敵前回頭の指示は加藤と東郷が言葉を交わして確認するのではなく、視線を交わして確認している。また、②東郷が笑みを浮かべる描写もない。言葉を交わす小笠原型Ⅰよりも、東郷と加藤の間の信頼関係を強調する描き方であると言える。本稿では、これら2つの要素を含んだ描かれ方を、「安保回想型」とする。

この安保回想型もまた、他書のベースの1つとなっている。例えば、仁木笑波『東郷元帥芳影録』（1928年）では、「参謀長また同じく鋭どき視線を長官に注いだ。秒、一秒？？以心伝心、互ひに黙笑はかはされた」と記されている⁽²²⁾。東郷の笑顔が描かれているものの、東郷と加藤との間に言葉は交わされていない。

以上のように、敵前回頭時の三笠艦上における東郷について、詳細に描かれるようになるのは1920年代になってからであった。この時期は、大別して小笠原型Ⅰと安保回想型と類型化できる2通りの描かれ方があったと言える。

Ⅱ 1930年代における描かれ方の変化

小笠原長生は、『撃滅 日本海海戦秘史』（1930年）において、敵前回頭時の描写を以下のように記述し、小笠原型Ⅰの要素の一部を変更している。

その途端！。それまで幕僚等の議論に耳をも貸さずして一意敵の態度に着目してゐた東郷大將は、突然右手を真直に挙げ、颯と左舷の方に一振して詰つと参謀長を見返つた。参謀長はその意を覚り

『艦長！取舵一杯！。』

と叫んだ。

『エ、取舵にですか。』

『さうだ、取舵だ。』

いひも終らず大將に向ひ

『長官！。取舵に致します。』

打領いた大將は会心の微笑を浮べ、依然として炯々たる眼光に敵の動静を看守つた⁽²³⁾

この『撃滅 日本海海戦秘史』における描写は、以下の要素を特徴としている。まず、小笠原型Ⅰでは、変針の指示は加藤友三郎の口頭での確認に東郷平八郎が承諾を与えることでなさ

れたのに対し、①東郷が自発的に右手を挙げて左方に振り下ろすことでなされている。その後、②東郷が加藤を振り返り視線を交わす。安保回想型との違いは、2人が視線を交わすのは、東郷が加藤に先行して指示を与えた後となっていることである。そして、③取舵の進路をとったあとに、東郷が笑みを浮かべている。これは、小笠原型Ⅰと違い、東郷と加藤との間の会話での確認が行われなくなったからである。

この描写方法では、東郷の司令官としてのリーダーシップはより強調される。東郷が加藤との間で確認を行わずに敵前回頭の指示を出すことで、東郷の戦機を見る目がより際立つからである。また、笑みを浮かべるのが回頭開始後となったことで、勝利への自信を表現するものとなっている。つまり、東郷の指揮官としての有能さを小笠原型Ⅰや安保回想型よりも、より強調した描き方であると言える。

社会教育協会編『社会教育パンフレット第199輯 東郷元帥』（1934年）では、「元帥は長剣を杖ついて艦橋上に屹立し、炯々たる眼光は益々輝き、結びたる口は愈々締め、戦機の熟する刻々を見る中、午後二時五分、距離約八千米、元帥の唇は突如動いた。『左舷回頭！』艦長の取舵の号令と共に、三笠の艦首は、俄然左舷に回頭し、敵と同舷の進路をとり、斜に敵の先頭を圧迫し始めた」と描写されており⁽²⁴⁾、東郷は右手を挙げずに声を出して回頭を命じている。どのように命令を出すのかに違いはあるが、1930年代には指揮官としての東郷の有能さがより強調される描き方となったことは共通していると言えよう。

さて、東郷が右手を挙げて左方に振り下ろすことで敵前回頭を指示するという大きな変化は、何故生じたのであろうか。小笠原は以下のように説明している。まず、日本海海戦時に三笠艦上にいた今村信次郎が、後年に東郷に対して「小笠原の詳伝を見ると眼と眼と見合して参謀長が叫んだやうに書いてありますが、私はその時丁度長官の真後ろにをりまして、長官が右手を挙げて左の方へおろされて、参謀長を見返へられたのを確に見ましたが、これは錯覚でもあつたのでせうか」と尋ねたため、東郷は小笠原に対して、「今村がかういつて来た、どうもさういふ証人が出て来たのだから仕方がないので、お前が見た通りだよといったから、今後詳伝を直してよいよ」と告げたというのである⁽²⁵⁾。

上記の『撃滅 日本海海戦秘史』での3つの要素を含んだ描写を「小笠原型Ⅱ」としたいが、同様の描写が小笠原長生『愛国読本』や小笠原長生『聖将東郷全伝』（1940年）、小笠原長生『聖将読本』（1941年）、小笠原長生『略伝東郷元帥』（1941年）でとられている一方で⁽²⁶⁾、東郷の笑顔が描かれないパターンも小笠原長生『東郷元帥の偉業』（1935年）や小笠原長生『偉人叢書第六 東郷平八郎』（1940年）でみられるため⁽²⁷⁾、東郷の笑顔が描かれるものを「小笠原型Ⅱ-1」、描かれない場合を「小笠原型Ⅱ-2」としたい。

小笠原型Ⅱ-2は1930年代の複数の書籍でもみられる。例えば、伊藤痴遊『元帥東郷平八郎』（1934年）や山口愛川『世界の大東郷』（1934年）、尾崎主税『聖将東郷と靈艦三笠』（1935年）などが挙げられる⁽²⁸⁾。基本的に、1930年代における東郷の笑顔の描写は小笠原が書いたものにしか無く、荒井勇蔵『修身の徳目と東郷元帥』（1935年）が数少ない例外である。そこでの記述は、

同司令長官は敵に接近せんが為め第一第二戦隊をして、南西に変針せしめたるを以て爰に彼我両隊は縦陣を以て相對し、其の儘直進すれば、互に反対に通過し去りて利害共に相均

しく、所謂五分々々の勝敗に了るべき形勢を成せり、敵の殲滅を期したる東郷司令長官の与する所にあらず、長官は右手をあげ左に振り加藤参謀長を顧みし利那「長官！取梶にすべきか。」と司令長官「諾」と答へて思はず会心の笑を浮べ、三笠は同五分遂に左折して東北東に変針し、斜に敵の先頭を圧迫せんとせり⁽²⁹⁾

というもので、ほぼ小笠原型Ⅰと小笠原型Ⅱ-1を混合させた記述と言える。小笠原の著書を参考にして書かれたとみて良いであろう。

基本的に小笠原が書いたものにしか東郷の笑顔が描かれなないのは、小笠原が普段から東郷の私設秘書官的な立場で東郷に親しく接していることから、東郷の人間味を表現し易かったのに対し、他の書籍の著者は東郷の神格化が進行した1930年代において、そうした東郷の人間味を表現し難かったからと考えられる。東郷の笑顔が描かれず、東郷が右手を左方に振り下ろすという派手な演出が描写されることで、小笠原型Ⅱ-2は東郷の戦場における司令官としての厳粛さを強調することになるのである。

以上のように、1930年代において、東郷が自発的に敵前回頭を命じ、笑顔も描かれ難くなるため、右手を左方に振り下ろすという演出も加わることで、東郷の指揮官としての有能さと厳粛さは強調され、東郷の神格化が進行していることがみてとれよう。ただ、重要なのは、神格化されつつも、その描かれ方には多様性があったということである。

では、戦後における司馬遼太郎『坂の上の雲』における描かれ方は、こうした1930年代までのものと、全く異なるか、それとも共通点を有するのかについて、次章で検討したい。

Ⅲ 戦後における描かれ方

敗戦と戦後の東京裁判により、日本の軍部に対する評価は大きく転換したものの、日露戦争のような数十年以上前の歴史は、比較的早く娯楽コンテンツとしての地位を回復する。

穴吹良博『三笠艦ものがたり』（1958年）は、日露戦争時の連合艦隊旗艦である三笠を擬人化し、その三笠の視点から日露戦争を描写した作品である。そこでは、「こうして胆をひやしなから走るぼくの艦上で、この時、重大な号令がかかった。『取舵一ぱーい！』加藤参謀長が左手を大きくあげて、伊地知艦長にいったのだ」と⁽³⁰⁾、敵前回頭を加藤友三郎が号令し、右手ではなく左手をあげたものとして描いている。戦前に刊行された書籍での描写と大きく異なるものであり、それらの資料をどの程度厳密に参照したのか不明である。

1969年に東宝が製作した映画『日本海大海戦』（監督は丸山誠治）では、東郷が加藤を振り返り、右手を左方に振り下ろした後に加藤が頷いている⁽³¹⁾。東郷が加藤と視線を合わせるのが挙手の前後という違いはあるが、ほぼ小笠原型Ⅱ-2を踏襲している。

「はじめに」でも述べたように、歴史学界から歴史認識の不備や事実誤認で多くの批判があったものの、司馬自身の認識としては、『坂の上の雲』は史資料に基づき、事実のみを記述したという位置付けであった⁽³²⁾。そのため、前章までに紹介したような戦前・戦時期に刊行された書籍での日本海海戦時の敵前回頭時における東郷平八郎の幾つかの描き方は、司馬にとっての選択肢であったと言える。

最終的に、司馬が描いた敵前回頭の場面は、以下のようなものである。

安保少佐は真之の横をすりぬけて後方へゆき長谷川少尉と交代した。のぞくなり、おどろいた。すでに彼我の距離は八千メートルに近づいていたのである。

「もはや八千メートル」

と叫び、そのあと、

—どちら側で戦さをなさるのですか。

と、どなった。

(※引用者中略)

ところが、かれがそうつぶやいたとき、安保砲術長の記憶では、かれの眼前で背を見せしている東郷の右手が高くあがり、左へむかつて半円をえがくようにして一転したのである。

瞬間、加藤は東郷に問うた。東郷が點頭した。このとき、世界の海軍戦術の常識をうちやぶったところの異様な陣形が指示された。

「艦長。取舵一杯。—」

と、加藤は、一度きけばたれでも忘れられないほどに甲高い声で叫んだ。

艦長伊地知大佐は、一段下の艦橋にいた。(※引用者中略)

伊地知がおどろいたのは、すでに敵の射程内に入っているのに、敵に大きな横腹をみせてゆうゆう左転するという法があるだろうかということであった。

伊地知はおもわず反問し、

「えっ、取舵になるのですか」

と、頭上の艦橋へとなりあげると、加藤は、左様取舵だ、と繰り返した⁽³³⁾

戦前における日本海海戦時の敵前回頭の描かれ方としては、小笠原型Ⅰ、安保回想型、小笠原型Ⅱ-1、小笠原型Ⅱ-2の4種類に大別できるが、『坂の上の雲』で司馬は小笠原型Ⅱ-2に、ごく一部、小笠原型Ⅰ-1の要素を織り交ぜていると言える。

まず、東郷が右手を左方に振り下ろすという小笠原型Ⅱの要素を採用しているとともに、小笠原型Ⅰにみられた、東郷と加藤との間の会話による確認を、具体的に記述するのではなく、「加藤は東郷に問うた。東郷が點頭した」という一文で織り交ぜている。

東郷が右手を振り下ろす描写は、前章でみたように、小笠原長生にとっては今村信次郎の証言によって新たに挿入したものである。小笠原としては、今村の証言による新たな事実を、東郷の命により記載したに過ぎず、東郷の描写をより派手なものにしようという意図はそれほど強くなかったと考えられる。加えて、小笠原は『明治天皇紀』編纂のための資料として東郷の代理で談話を提供した際に、その速記を東郷に確認してもらったところ、手を挙げた描写が東郷によって削除され、その理由を東郷が「それは誰が手を挙げたの誰が考へたといふのぢやない。前年の八月十日の黄海々戦に苦い経験を経てゐるから、幕僚は申すに及ばず誰でもあの時の状況を見てをつたものは、ア、して敵の頭を抑へなければならぬといふことは誰の考へにもわかり切つてをつた。東郷がやつたの、加藤がやつたのといふ性質のものぢやない。殊に明治天皇の御伝記の御材料になら、自分が海戦後捧呈した戦闘詳報があるから、あの程度でよろしいと思ふ。誰がかうした、彼がかうしたといふやうな枝葉にわたることは、避けるのが至当であると考へたから消した」と説明したことを証言しており⁽³⁴⁾、東郷自身が描写をドラマティ

ックにすることに抑制的であったことを述べ、東郷の高潔さを強調しようとしている。しかし、小笠原の意図はどうか、1930年代の東郷の神格化の中で、東郷の挙手は東郷が敵前回頭を主導したことを示す重要な要素として、多くの書籍に採用される要素となっていた。

司馬はサブ・リーダーとしての秋山真之を主人公の一人に据え、「東郷は真之の樹てた戦術原則のとおり艦隊を運用した」と記述することで⁽³⁵⁾、『坂の上の雲』において、部下を信頼するリーダー像の象徴として東郷を描いた。小笠原型Ⅰにおいて、この部下との信頼関係は東郷と加藤との会話で表現されていたのだが、それを司馬はごく簡潔にしか記述せず、同時に司令官としての東郷の能力を象徴する要素であった右手の左方への振り下ろしを描写したのである。すると、戦術選択は秋山に負うところが大きいものとして描いているがために、この右手を左方に振り下ろす東郷の動作は、司令官としての有能さを示す小笠原型Ⅱでの意味合いが減退し、単に戦闘の転換点を印象付ける、荘厳さを演出する行動に過ぎなくなる。

また、小笠原型Ⅰや小笠原型Ⅱ-1にみられるような回頭前後の東郷の笑顔を、司馬は描かなかった。そもそも、司馬は『坂の上の雲』で、東郷の笑顔をほとんど描いていない。

小笠原が描く東郷の笑顔は、小笠原型Ⅰでは颯爽とした司令官像を演出する要素であり、小笠原型Ⅱ-1では勝利を確信した司令官としての余裕を表現するものであった。そして、それは東郷に身近に接していた小笠原だからこそ描写できる、東郷の人間味でもあった。

その東郷の笑顔を描写しなかったことによって、『坂の上の雲』における東郷は、泰然としたリーダーとして描かれ、右手を左方に振り下ろす動作の描写とともに、敵前回頭時の三笠艦橋の厳粛さが強調されることになるのである。

この三笠艦橋の厳粛さは、『坂の上の雲』がNHKスペシャルドラマとして映像化された際、さらに強調されることになる。日本海海戦における敵前回頭の場面は2011年12月18日に初回放送された「第12回 敵艦見ゆ」の終盤で描かれた。そこでは、渡哲也演じる東郷平八郎が加藤らに背中を向けたまま、右手を左方に振り下ろすと、草刈正雄演じる加藤友三郎が静かな声で前方を見据えたまま「艦長、取舵一杯」と命令を出す⁽³⁶⁾。

原作では東郷と加藤の間で言葉が交わされるが、ドラマ版において東郷は振り返らず、三笠艦橋にいる者は皆、真っ直ぐに前方を凝視しており、一言も発しない。加えて、原作では加藤は三笠艦長の伊地知彦次郎に取舵の号令を甲高い声で叫んでいるが、ドラマ版では必ずしも声が高くはない俳優につぶやくように静かに回頭を号令させている。総じて、ドラマ版では、三笠艦橋の厳粛さを強調するような原作からの変更が複数加えられていると言える。

司馬の没年は1996年であるため、『坂の上の雲』の映像化に司馬は関与していない。そもそも、司馬は生前、『坂の上の雲』の映像化には反対であった⁽³⁷⁾。上記の三笠艦橋上の厳粛さを強調するような変化は、司馬個人の問題ではなく、戦後に形成され、共有されるイメージと言えるであろう。

以上のように、『坂の上の雲』にみる戦後の敵前回頭時の描かれ方は、戦前までの表現方法の類型を引き継ぎつつ、そこから特に厳粛さを強調するように変化をしていったものであると言える。

おわりに

日本海海戦時における「丁字戦法」移行のための敵前回頭について、詳細に描かれるようになったのは1920年代になってからであり、それには小笠原長生の影響が大きかった。同時期には安保清種の回想も見られた。

小笠原はその後、自身の描写を1930年代に変化させる。概ね1920年代に描写されたものを小笠原型Ⅰ、1930年代以降に描写されたものを小笠原型Ⅱとし、その小笠原型Ⅱは小笠原型Ⅱ-1とⅡ-2に分類できる。日本海海戦における敵前回頭を描いた書籍は、基本的に小笠原の描いたものか安保の回想を参照しているため、『三笠艦ものがたり』のような特殊なものを除けば、大半がこれら4種類の内のどれかに分類することが可能である。

それらの諸要素は、以下の表のようにまとめられる。

表 日本海海戦における敵前回頭の描かれ方の類型

類型	要素
小笠原型Ⅰ	①敵前回頭は加藤が東郷に口頭で確認を求めた後に実施。 ②東郷が加藤に回頭の指示を与えた後に笑みを浮かべる。
安保回想型	①敵前回頭は加藤と東郷が視線を交わして確認した後に実施。 ②東郷が笑みを浮かべる描写がない。
小笠原型Ⅱ-1	①敵前回頭は東郷が自発的に戦機を見定めて決定。右手を挙げ、それを左方に振り下ろすことで指示。 ②東郷が加藤を振り返り視線を交わす。 ③回頭開始後、東郷が笑みを浮かべる。
小笠原型Ⅱ-2	①敵前回頭は東郷が自発的に戦機を見定めて決定。右手を挙げ、それを左方に振り下ろすことで指示。 ②東郷が加藤を振り返り視線を交わす。 ③東郷が笑みを浮かべる描写が無い。

東郷平八郎の神格化は1920年代から始まるものの、戦前の日本海海戦における敵前回頭の描き方は上記4種類あり、東郷の司令官としての能力の高さや有能さを強調するように変化をしていったものであった。つまり、1930年代にかけて東郷の神格化は確かに進行したが、その描かれ方には多様性があったのであり、特に東郷の笑顔が描かれるかどうかで、東郷の人物像は大きく左右されることになる。

そのように、神格化されつつも、存在した描写の多様性を統合したのが、司馬遼太郎『坂の上の雲』であった。司馬が描写した敵前回頭時の三笠艦橋は、上記4種の描き方を混合させたものである。『坂の上の雲』が秋山真之を主人公の一人に据え、実務の大半を担ってトップを補佐するサブ・リーダー像を主軸の一つにしたことによって、上記4種類の東郷の司令官としての能力の高さを表現するために存在した諸要素は意味を変え、厳粛さを表現する演出となった。東郷の笑顔が描かれないことはそれに拍車をかけることになる。そして、『坂の上の雲』が映像化された際、その厳粛さはさらに強調されたのである。

先行研究の指摘するように、東郷の神格化の過程において小笠原の著作物の影響は極めて大きかったが、同時に、日本海海戦における敵前回頭の描写だけでも小笠原の描き方は3種類あり、多作であったがために、そのどれか一冊が戦前における敵前回頭時の三笠艦橋の共通したイメージを形成したわけではない。

むしろ、そうした共通イメージは『坂の上の雲』によって、戦後に形成されていく。戦前にあった描写の諸要素を整理・統合し、厳粛さを強調するように三笠艦橋が描かれ、それがさらに映像化によって強調されていったためである。

東郷の神格化とイメージの固定化は、戦前に完了したわけではなく、むしろ、一部形を変えて、戦後に生じたのである。

注

- (1) 山田朗「東郷平八郎の虚像と実像」(『歴史評論』469、1989年)、千葉功「日露戦争の『神話』 日露戦争とその後の日本社会」(小風秀雅編『日本の時代史 23 アジアの帝国国家』吉川弘文館、2004年)。田中宏巳『小笠原長生と天皇制軍国思想』(吉川弘文館、2021年)第2～3章。また、その他にも、戦跡や博物館等、様々な手段で日露戦争の記憶は維持・誇張される(木下直之「日露戦争を語るもの」、小森陽一・成田龍一『日露戦争スタディーズ』、紀伊國屋書店、2004年)。
- (2) 田中宏巳『東郷平八郎』(筑摩書房、1999年)第1章。
- (3) 前掲山田「東郷平八郎の虚像と実像」、15～16頁。野村實『日本海海戦の真実』(講談社、1999年)。
- (4) 田中宏巳『秋山真之』(吉川弘文館、2004年)198～200頁。
- (5) 同上、200～203頁。
- (6) 大江志乃夫『バルチック艦隊 日本海海戦までの航跡』(中央公論新社、1999年)。
- (7) 福岡良明『司馬遼太郎の時代 歴史と大衆教養主義』(中央公論新社、2022年)第3章。
- (8) 例えば、成田龍一『司馬遼太郎の幕末・明治『竜馬がゆく』と『坂の上の雲』を読む』(朝日新聞社、2003年)、中村政則『『坂の上の雲』と司馬史観』(岩波書店、2009年)、原田敬一『『坂の上の雲』と日本近現代史』(新日本出版社、2011年)。
- (9) 前掲田中『東郷平八郎』第1章、前掲田中『小笠原長生と天皇制軍国思想』第3章。但し、前掲野村『日本海海戦の真実』222～225頁で野村氏は「丁字戦法」不採用論への反論として、東郷の伝記の変化を分析している。
- (10) 例えば、一ノ瀬俊也『飛行機の戦争 1914-1945』(講談社、2017年)、小倉徳彦「日露戦後の海軍将校による著作活動－小栗孝三郎とその周辺－」(『日本史研究』696、2020年)、中嶋晋平『戦前期海軍のPR活動と世論』(思文閣出版、2021年)など。
- (11) 例えば、伝記や文学作品を使用史料から排し、回想録を中心に日本海海戦時の三笠艦橋上の様子を再構築しようとしたものとして、西尾林太郎「加藤友三郎と日露戦争」(『愛知淑徳大学論集－交流文化学部篇－』13、2023年)。
- (12) 村上俊蔵編『東郷大将詳伝』(成功雑誌社、1905年)146～167頁。
- (13) 同上、152頁。
- (14) 浜中仁三郎『東郷大将』(日露戦争記念社、1906年)215頁。
- (15) 水野広徳『此一戦』(博文館、1911年)120頁。
- (16) 芳文堂編『東郷大将』(芳文堂、1906年)88～100頁、横山健堂『大将東郷』(春陽堂、1915年)496～512頁。
- (17) 小笠原長生『東郷元帥詳伝』(春陽堂、1921年)564～565頁。
- (18) 前掲田中『小笠原長生と天皇制軍国思想』、130頁。
- (19) 小笠原長生『小学生全集 1 乃木將軍と東郷元帥』(興文社、1929年)247～248頁。
- (20) 久米元一「東郷元帥」(『少年少女偉人全集 2』、金の星社、1930年)318～321頁。

- (21) 安保清種「海戦の勝敗と主将」（加藤元帥伝記編纂委員会編『元帥加藤友三郎伝』、宮田光雄、1928年）59～60頁。
- (22) 仁木笑波『東郷元帥芳影録』（春江堂、1928年）81頁。
- (23) 小笠原長生『撃滅 日本海海戦秘史』（実業之日本社、1930年）124～125頁。
- (24) 社会教育協会編『社会教育パンフレット第199輯 東郷元帥』（社会教育協会、1934年）20～21頁。
- (25) 東京日日新聞社、大阪毎日新聞社『参戦廿提督回顧卅年日露大海戦を語る』（東京日日新聞社、1935年）342頁。
- (26) 小笠原長生『愛国読本』（実業之日本社、1932年）106～107頁、小笠原長生『聖将東郷全伝』（聖将東郷全伝刊行会、1940年）347頁、小笠原長生『聖将読本』（南方出版社、1941年）141～142頁、小笠原長生『略伝東郷元帥』（南方出版社、1941年）115頁。
- (27) 小笠原長生『東郷元帥の偉業』（海軍省、1935年）36～37頁、小笠原長生『偉人叢書第六 東郷平八郎』（三教書院、1940年）188～189頁。
- (28) 伊藤痴遊『元帥東郷平八郎』（郁文舎出版部、1934年）479～480頁、山口愛川『世界の大東郷』（一心社、1934年）163頁、尾崎主税『聖将東郷と靈艦三笠』（三笠保存会、1935年）61～62頁。
- (29) 荒井勇蔵『修身の徳目と東郷元帥』（成武堂、1935年）35～36頁。
- (30) 穴吹良博『三笠艦ものがたり』（刀江書院、1958年）127頁。
- (31) 『東宝 DVD 名作セレクション 日本海大海戦』（東宝、2015年）。
- (32) 司馬遼太郎「『坂の上の雲』秘話」（司馬遼太郎『司馬遼太郎全講演』第3巻、朝日新聞社、2000年）359頁。
- (33) 司馬遼太郎『司馬遼太郎全集』第26巻（文藝春秋、1973年）408頁。
- (34) 前掲『参戦廿提督回顧卅年日露大海戦を語る』342～343頁。
- (35) 前掲『司馬遼太郎全集』第26巻、413頁。
- (36) 『スペシャルドラマ 坂の上の雲』第3部「第12回 敵艦見ゆ」（NHK エンタープライズ、2012年）。
- (37) 福田みどり「夜明けの会話－夫との四十年」（文藝春秋編『司馬遼太郎の世界』、文藝春秋、1996年）95頁。

附記

本稿は JSPS 科研費（基盤研究（C）、課題番号 23K00816、研究代表者兒玉州平）による研究成果の一部である。